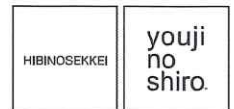


SHIROYAMA Biotope

子どもが子どもらしく生きる空間

基本設計・コンセプト
2024/02/09



子どもたちが自立して育ち、地域から親しまれる場所となるように

保育のこと

さまざまな体験を通して 子どもの“生きる力”を培う保育園

城山保育園は平成4年（1992年）に設立され、“豊かな心と身体を育み、自立を見守る”という保育基本方針を掲げ保育に携わってきました。“一人一人を大切に、生きる力を培う保育”を使命とし、社会に出て生き抜く力を育てるために体験保育や人と人の触れ合いの中で、子どもたちの感性や親しみを持って挨拶できる力を育む保育を実践しています。また地域における“子育て支援の提供拠点オンリーワン”を使命とし、地域全体の子育てを担う取り組みも実践しています。

1 感性を育む “里山”での保育体験

城山保育園南山の前にある山を活用した“里山プロジェクト”という活動では、枯れた枝木などを集めて焼き芋を作ったり、斜面を利用して自然と一体となった遊具で遊んだり、自然の中での体験を通して感性を育みます。里山の一部に畑を作り、子どもたちが野菜を育て、収穫し、それを給食に利用して味わうという、食育につながる活動も行っています。



2 人とのふれあいを 大切にする保育

園の子ども同士のふれあいはもちろん、散歩に出掛けた時に出会う地域の人、園庭開放の時に園に来る未就園児の親子、施設に伺って会いに行く地域のお年寄りと積極的に挨拶をすることを通じて子どもたちなりに人との関係性を学び、築いています。“里山プロジェクト”では、園の子ども同士だけでなく、多くの大人や他園の子どもたちも参加するため多くの人たちと触れ合う機会となっています。

地域のこと

様々な表情の環境を持つ地域

城山保育園の建つ多摩ニュータウンの向陽台地区は昭和63年（1988年）に団地の入居が始まり稲城エリアの中で最初に街開きをした街です。多摩丘陵の変化に富んだ地形から誕生したこの街には「樹林・水辺・まちなか・丘」といった近距離に様々な表情の環境があります。自然が多く残る地域から街へと発展したことで様々な表情の環境を持つ地域へと変化していきました。



“感性”と“社会性”を育み、社会で生きる力を身に付ける

地域とつながる環境をつくる

ダイニングは子育て支援室としての機能もあり、未就園児の親子向けに交流の場となったり、地域のイベントや集まりの場となったりすることで園に通っていない地域の方々が園を知るきっかけになり、子どもたちも地域の人との交流の機会が増えます。地域に開いた場所とすることで人々が自然に笑顔で挨拶しやすくなる環境をつくりました。

まちなか エリア

子どもたちからも通りを通る人からも庭を介してお互いが程よく見える関係で日頃から顔を合わせるコミュニティが生まれます。



樹林エリア

吹抜けのネット遊具では上下階がつながり樹林の木々のような場所で様々な遊びが生まれます。

多様な感覚を引き出す 環境をつくる

稲城に様々な表情の場があったように園内にも様々な表情の場をつくり、子どもたちの多様な感覚を引き出す環境“ビオトープ”をつくります。ビオトープとは“生きものが生きものらしく生きることができる空間”のことを言いますが、城山保育園では“子どもが子どもらしく生きることができる空間”をビオトープと定義し、園内に様々なビオトープをつくることで感性を育む環境をつくります。園内のビオトープで感性を育める環境をつくりました。



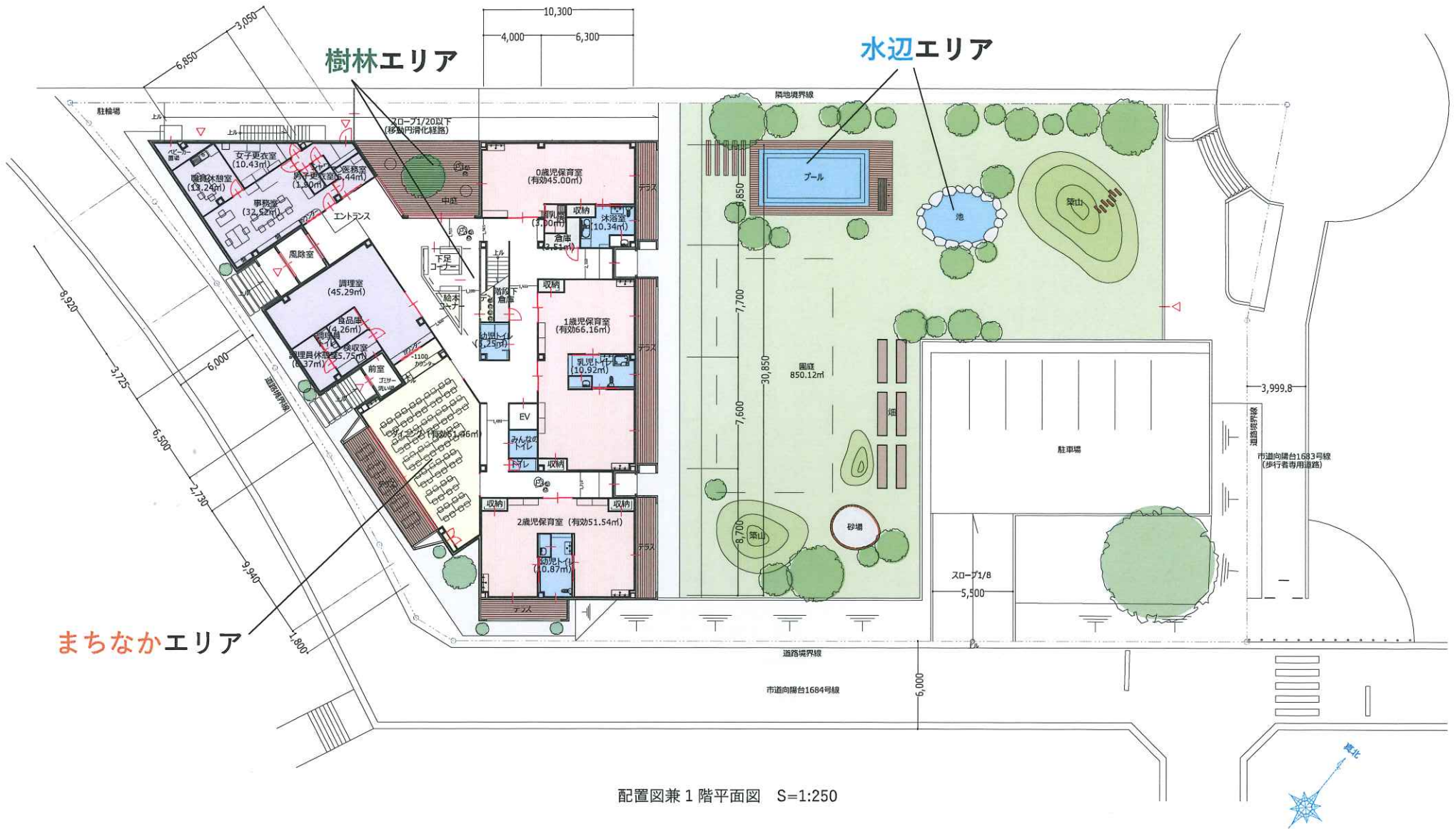
丘エリア

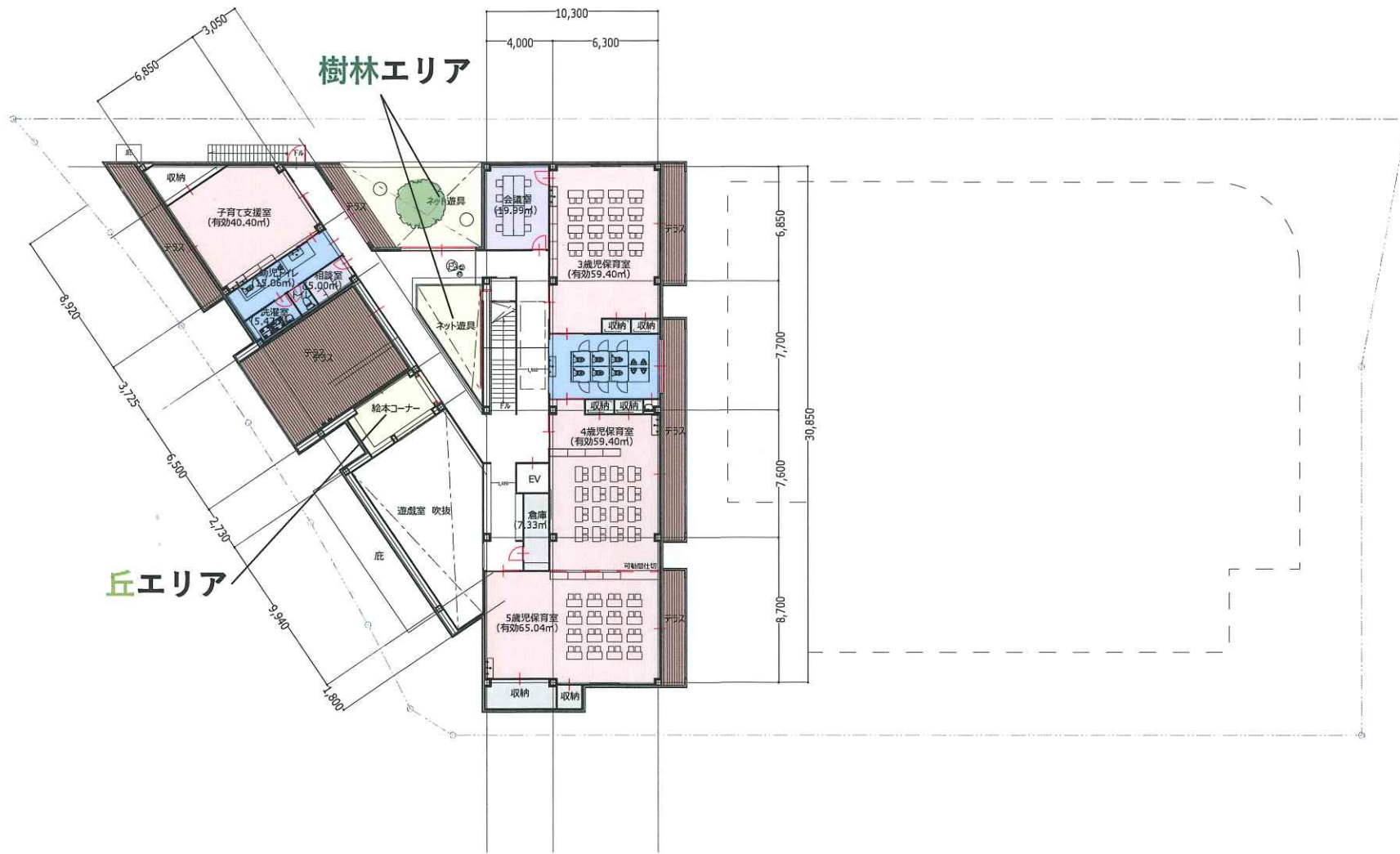
絵本コーナーでは丘のように外のテラスから中のロフトまで上がることができ、座ったり寝転んだり色々な場所で本を読むことができます。



水辺エリア

園庭には水辺のように池があり、季節によって表情を変える様々な植物が植わっています。





2階平面図 S=1:250





まちなかエリア

1. 地域の街並みと調和し、 親しみを持ってもらえる外観

住宅街である周辺のスケールに合わせ建物を分節化し、周辺環境に馴染む外観としています。天気の良い日はテラスで過ごすこともできるダイニングの窓は全開放でき、地域の方々に園の活動を身近に感じてもらえます。



まちなかエリア

2. 通りに面して地域とつながるダイニング

子どもたちからも通りを通る人からも庭を介してお互いが程よく見える関係で日頃から顔を合わせることでコミュニティが生まれます。調理室は子どもたちが見える場所に設けて作る過程が見えることで食への関心を高めます。



樹林エリア

3. 遊びが生まれる屋内ネット遊具

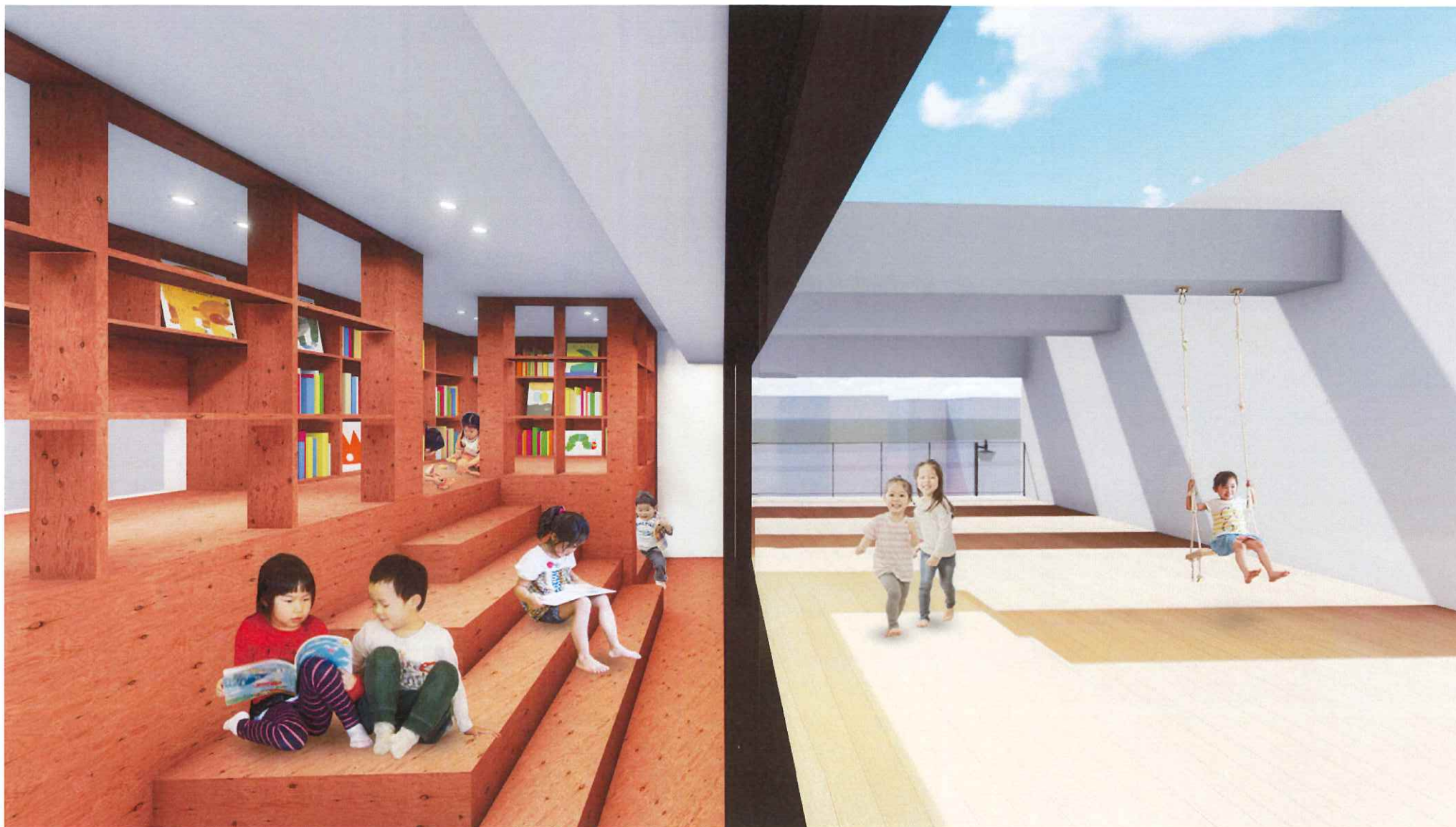
上下階がつながり、キツキが開けたような穴に籠れ、園舎の中心で様々な遊びが生まれる場所になっています。



樹林エリア

4. 上下階がつながる屋外ネット遊具

シンボルツリーのまわりにはネット遊具を設け、上下階に移動でき、木を登るように視点の変化を楽しみながら遊ぶことができます。



丘エリア

5. 興味を広げる絵本コーナー

周辺の地形の特徴である「丘」を表現し、外のテラスから中のロフトまで上がることができ、座ったり寝転んだり色々な場所で本を読むことができます。たくさんの情報に触れ、興味を広げるきっかけをつくります。



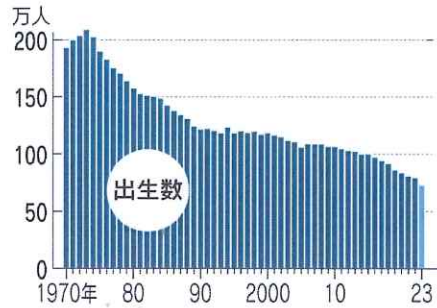
水辺エリア

6. 地面の起伏や池・樹木で自然に触れる園庭

自然の地形のように凸凹した地面、雨が降ると水が溜まる池、季節によって表情を変える木々がある園庭は自然の恵みを感じられる場所になっています。プールは夏には通常のプール、秋は落ち葉のプールになるなど一年を使える場所になっています。畑も設け、作ることから体験することで食への関心を深められる場所にもなっています。

■ 選ばれる園づくり

現在の日本は少子化に歯止めがかからない状況です。このまま少子化が続けば幼稚園・認定こども園の数は不変であること、そしてこれまでと同様に園児数を獲得していく必要性があることを考えると、これまで以上に“選ばれる園づくり”が必要になってきます。園の教育内容を伝えていくことがこれまで以上に重要になってくる昨今、園舎の建て替えの中で園の先生方と一緒に考えて、素晴らしい教育環境を創造できればと願っています。



2022年には統計のある1899年以降で初めて「80万人割れ」し、23年も過去最少を更新する見通しです。

■ 子どもたちにとって“本当に必要なもの”を考える園舎づくり

日比野設計は1972年の創業以来、創業52年を迎え、建築設計事務所として建築を通して社会に貢献し、日比野設計+幼児の城では園舎設計の専門集団として、国内外で多くの園舎設計を手がけてきました。240余りの入選・受賞をしており設計した園舎を高く評価していただいております。

子どもたちにとって“本当に必要なものとは何か”ということを常に考え、新しい施設を提案していきます。



建築を通じて関連するデザインが必要な物はコンセプトを維持出来るよう園のトータルプロデュースも積極的に行っていました。

園舎についての書籍「The World Designed for Children」をオーストラリアの出版社「Images」から世界に向けて英語と中国語で出版しました。

■ 調査研究による効果の発信

日比野設計+幼児の城では、大学や企業などの専門機関と共同で子どもと環境に関する調査研究を行い、論文発表も行っています。データで見えるようにすることで根拠のある効果として外部に発信することができます。

福井大学 西本研究室と共同調査を実施した例では園舎や園庭が子どもの動作や体力に影響を与えることを明らかにしました。

論文①

「保育施設における園児間で個人差のある動作を促すための遊び環境に関する研究」

西本 雅人・山口 仰・日比野 拓

(日本建築学会計画系論文集 第88巻 第805号, 843-854, 2023年3月)

論文②

「子どもの基礎運動能力が向上するための遊び環境づくりに関する研究体力の違いによる遊びに含まれる36動作の種類数の差」

西本 雅人・山口 仰・日比野 拓

(地域施設計画研究 39 2021年7月 日本建築学会建築計画委員会

施設計画運営委員会 地域施設計画小委員会)